

夢三題

薄ら寒い風が絶え間なく後ろから追いかけて来て、私の歩いて行く道端の草の枯葉をやさやと鳴らせていた。何処か、故郷の野道らしい。南国ではあるが、野原は秋もすぎで冬に入りかけた、枯木と枯葉と稲株ばかり残っている吹き曝しの田圃がずっと続いているばかりだった。野道がうねって田圃の間をぬっている。学帽を被って、本の包をかかえた小学生の私の影が田圃の畝の上を上下しながら伝って行く。学校からの帰り道らしい。私はもう泣いてはいなかった。しかし、思い出したようにしやくり上げた。激しく泣いたあの泣き疲れと言うよりも、妙に楽しさのないひしひしと淋しい気持ちであった。私が歩くにつれて、影もその淋しさを分かつかのようになり、細くゆれながら歩いた。風は絶え間なく吹いていた。私の淋しい胸の中までもさやさやと吹き抜けていった。

私が激しく泣いたのは、あの事だったろうか。そう、何でも、小学校の校長が机の前に腰掛けていた。細長い顔の三角眼をして、額から出るようなキンキンした声で饒舌る、狡猾で冷酷な校長がいた。私は居残りをして、中学の入学試験の予習を受けていた。彼の方へ進んで私が予習の答案を差し出すと、校長はジロリと私の顔を見ながら、
「そんなに威張らんでもいい」

と言った。妙な言いようだった。聞きようによっては、冗談ともとれるこの言葉がこの校長からこうして言われると、その卑しい鋭さで私の胸をついた。私はたちまち蒼くなつて、何時もの反抗心が浮かんで来た。私はもしかしたら、もう大人だったかも知れない。校長が髭を下歯で噛むようにしながら見ている答案へ手を伸ばして、私は矢庭に、それをひったくった。

「何をするかッ」

と、校長は怒鳴った。そのまま後も見ず、私は答案を掴んでもみくちやにしながら、さつさと教室へ戻った。皆が帰ったあとの雨戸を閉めた薄暗い教室で、もう帰ってしまったおうと、勝手に帰り仕度をした。中学へ行く為には試験の準備をしなければならぬし、嫌でもあの大嫌いな校長の世話にならねばならない。あの小学生の自分にさえ見え透いて判るような策略と、ただ軽蔑だけを起させるような尊大さと、そして、他の何よりも汚らしく子供の眼に映った女教員に対する好色と。そんな校長に特に世話になる。糞ツと思うと、涙がポタポタ落ちた。――そうして帰った途中の道だったろうか。

いやいやそんな事ではなかった。もっと変な事だった。確かにもっと大きな声でわあわあ泣いた筈だ。そう言えば私はもっと小さかった。三年の頃だった。そうだ。あれに違いない。学校から米屋の清吉と一緒に帰る道だった。学校から四、五町も来たと思う時、私は突然眩暈がして立止まった。清吉が心配して私の顔を覗き込むと、私は、

「気持ちが悪い」

と言ったまま踞んでしまった。

「気持ち悪いかえ？そいなら学校へ戻ったらええ。俺ん負ぶってやるに。おぶされ」

清吉は背中を出して、無理に私を負ぶった。清吉は私よりも頑丈な子供だったが、同級の私を負ぶっては、軽い筈はなかった。彼は頸くびに筋を立てながら学校へ向かって歩きだした。しばらく行ってから、

「まだ気持ち悪いかえ？」

と清吉はきいた。私は清吉に負ぶさると、不思議なほどすぐに眩暈を忘れてしまったの

だが、そう訊かれると、そんなに急に良くなるわけがない、と自分でも思い込んだ。私は苦しそうな声で、

「うん」

と答えた。その癖ちつとも苦しくはなかった。清吉は段々心配になって来たらしく、眼に見えて早く歩き出した。負ぶさっている私の腕にも、せいせい言う彼の苦しそうな呼吸の調子がよく判った。私はもう何ともないのに、こうして負ぶさっているのが辛くなってきた。清吉がこんなに一生命になつてくれるのに、自分がこうして何でもない気分になつてしまったのでは、済まないと言う気がして来た。自分もつと病気が悪くならなければいけないに違いない。そう思うと私は急に泣き出した。泣き出しでもしないと、清吉の一生懸命なのにそぐわないからであった。清吉は吃驚して駆け出した。どんどん背中中響くように駆ける清吉の体の上で激しく揺すぶられながら、私はもう何うしようもない気持ちになつて、わあわあと大声で泣いた。学校へついた時には、私は涙だらけになつて泣き叫び、清吉は真っ赤になつて眼が飛び出そうな顔をしていた。私が小使に助けられて、宿直室の赤い毛布の上に寝かされると、職員室から岸田先生が驚いて出て来た。先生は私の額にさわってから、脈をしばらく見ていたが、私がまだ泣きながら、

「先生、清ちゃんにお礼を言つて」

と言うのを聞いて、笑いながら、

「ああ、よしよし。しばらく寝ておれ」

と言つて、出て行つた。その様子から、私は先生に胸の中まで見抜かれてしまったような気がして、堪らなく恥ずかしくなつた。涙はたちまち乾いてしまった。しかし、嘘をつ

いて泣いたと言う疚しさが、その後、私をすっかり押さえつけて、思い出したようにしゃくり上げる度に、段々と憂鬱になっていった。

その時の帰り道だったかも知れない。道は細く曲がり曲って長く、涯なく続いていた。後ろに残して来た筈の学校も、帰る先にある筈の自分の家の部落も、私の視野には入らなかった。ただ冬の野が、故郷でありながら夢の中だけで許されるような、涯もない拡がりの中に何処までも続いている、私が小学校の子供のまままで時々しゃくり上げながら、風の吹く中をすたすた歩いている、と言うのだけが、その時の現実であった。

その二

風はなかった。寒くもなかった。私は土手の上に登って、四、五町ばかりの空き地の向う側に並んでいる家並みを見つめていた。薄日がその家々の壁にさして、家陰や軒下の影が淡く出来ていた。それに比べて空の暗いことは、まるで雪でも今に降って来そうな暗い色をしていた。しかし少しも寒くはなかった。春だったか？あるいは夏だったかも知れない。その暗い空の下に、薄明るく並んでいる人家を、まるで聴衆か何かのように思っていて、私は胸を張り、見栄をきって、演説でもしそうであった。しかし演説はしなかった。私は注意深く左手にむすんでいる細い糸を調べた。私は左腕を少し引いて見た。糸には重いねばるような手応えがあった。左腕にむすんだ糸は、ずっと伸びて、空き地の上を低くたると、それからゆるやかに登って、見えないくらいに遠く高く登って行って天に達していた。そこに月のように丸くて白い凧が上がっていた。凧は暗い空に白くくつきりと浮かんでいた。私は再び糸を引いて見た。重い手応えの中に、確かに凧の下りる気配があった。

ここの地上ではこんなに凧いでいるが、あそこまで登ったら相当に凧があるはずだと私は思っていたのだ。凧が下りそうだと判ると、私はさっきの自信を失ったように慌てて、急いで糸をたぐった。

凧を下して手にとつて見ると、それは真つ白な丸いすべすべした珠であった。私はそれと知って空へ上げた筈なのに、珠ならば糸の手応えが重かったわけだと、今更のように考えた。そして、珠ならば少しぐらいの凧ではもう上がるまいと考え、手に持って少し思案した。珠はすべすべとして白く光り、やや重みがあつてひやりとする冷たさを持つていた。私は珠を両手の掌にのせ、そのなめらかさと重みと冷たさとの感触を楽しむかのように、軽く上下に揺すぶった。

楠の太い幹の表面のぼこぼこした肌を、掌でごしごしと激しくこすると、しばらくして掌の感覚が痺れたようになる。その掌で自分の頬をさわると、何時もなら触つてもちつとも気持ちよくもありそうもない自分の頬が、まるですべすべとして快く、誘惑的な感触をさえ覚えさせる。之が、私が子供の頃、人に教わつて何度も楽しんだ不思議な経験であった。

その球が、ただ触れただけでそのような快さを覚えさせたのは、確かに珠の功德だと私は思った。私は珠を楽しんでいる内に、確かにこの珠には、私の願望を反映し、それに応じた能動のあることを感じ始めた。そしてこの珠の与える感触が、間もなく恋人の頬の感触に変わって行くのを意識した。

大きな農家の土間で、たたきの広さは二十坪もあっただろうか。広い土間だった。土間のやや隅によったところに大きな爐が出来ていて、その中には炭火が山と積んであって、カンカンおこっていた。その真上に、高い天井から得体の知れない怪物が、縄でくくられてぶら下がっていた。一番下には太さが三抱えもあるような、一杯に膨らんだ袋のような胴体があつて、そのふくろの上の口に当たると言ったようなところに、頭が二つ出ている。その頭には大きな眼が二つずつ付いていた。あるいは三つずつだったかも知れない。その頭の上には、無数の細長い足がついていた。足は生気を失ったようにだらしとしていたが、この怪物が未だ死んでいないと言うことは、その眼が時々緑色がかつた鋭い光を発するのを見ても判った。この怪物はどうやら下の爐の火で炙られているようだった。天井から吊下った縄はきしるような音を立てて回っていた。怪物の体は油汗が出ているように光っていた。

私はこちらの座敷の上り端に腰掛けて、この怪物を、恐怖と安堵の交じった気持ちで眺めていた。私の後には、一人の女が座敷に坐って縫物をしていた。三十五、六のついぞ見たこともない女で、この農家とは、凡そ不似合いな、黒繻子の襟のかかった粹な着物を着ていた。彼女は顎を襟に埋めるようにしながら上目づかいに話しかけるのであった

「鳥賊はこの頃、温血動物になったのですよ」

と言う。私はそれで、この怪物が鳥賊の化物であることを、漠然と悟ったのであった。

「何故温血動物になったのかと言いますとね、人間を沢山食べたからですよ」

と教えるように言う。私は訊ね返した。

「人間を食べたんですって？…：一番最初に人間を食べたときは、どんな気持だったでし

よう。さぞ気味悪かったでしょうね。こう、嘔むと、こう、生暖かい血が出て来るでしょう？」

と言いながら、私は自分ながら変な事を言い出したものだ、と考えるのだった。女はニツと笑って、直ぐには返事をしなかった。その歯が思い掛けなく汚くよごれていたのも、私は不快になって顔をそむけた。女は、

「今までは、温かいものを食べつけませんでしたからねえ。でも一人二人と食べて行くうちに、もうやめられなくなったんですよ、おいしくて。そりゃあおいしい筈ですわ、人間ですもの」

こう言って、縫糸を歯でコチンとかみ切った。馬鹿に黒い着物を縫っているようだった。私は女の話から、土間に吊下っている怪物の、あの膨らんでいる腹には、人間の頭がまだ消化し切れずに、三つ四つ入っているのではないかと思った。女は言った。

「人間は、おいしいばかりでなくて、食べるとほんとに智慧がつくのですよ。そしてあんなに大きくもなるのですよ。ねえ、だから鳥賊だって、食べずにはいられないじゃありませんか。……」

私は、女の話を引きながら、一体この女は、自分とどういう関係なのだろうか、真剣になって考え始めた。確かに今迄逢った事も見た事もない。名前だって知らない。何故ここにいるのかも判らない。

「――」

と女は話を止めると、顔を上げて私をじっと見た。そして女の眼は段々底深く拡がって行った。冷たい眼じゃない。勿論婉かしい眼ではない。ただ何となく恐ろしい眼だ。私は

その大きくなって行く眼を見ているうちに、不意に気がついた。彼女が全然未知の女であると言うことも、何故ここにこうして坐って私に話しかけているかと言うことも、一時に悟ることが出来た。確かに私を呑もうとする眼だ。私はこの眼ばかりになった女に見据えられて、身動きの出来ない程の恐怖に襲われた。鳥賊だ。鳥賊だ。鳥賊だ。私は動けなかった。私は必死になって立上ろうとした。上り端の木が、妙に私の尻にねばりつく。私はこの木を体から引き離そうと、手に力を入れて押して、言う事をきかない足を、全身の気力で叱りつけるようにして、突っ張った。私はふわふわする土間の地面を思い切って蹴って、入口に達した。怪物は確かにもう爐の上に下りて、自分の粘液で灰神楽を立てて火を消して、そして私の背後に迫ろうとしているらしい。私は入口の障子を破って外へ飛び出した。人っ子一人居ない淋しい通りを、ともすればすみそうになる足を叱りつけ叱りつけ、地面に叩きつけて前へ躍んだ。しかし鳥賊は、宙を泳いで来るらしい。私は背中にもうその生臭い気配を感じた。――鳥賊だ、鳥賊だ――と叫ぼうとした。しかし私の息は妙に喉につまり、死物狂いでやっと出た声は、犬の遠吠えのようななたよりの無い声となって、現実の世界へ突き抜けた。